

私のほっとな時間

ぎらっとLIKE WORK

KAWACHINAGANO CITY

河内長野で輝いている人に聞きました

VOLUME
16

築140年の古民家を直して暮らす
綱本武雄さん・琴さん



自宅の軸組模型（右）と奥の重要文化財山本家住宅の絵は武雄さん作

古民家で紡ぐ
こごちよい暮らし

ほっと
大切にしているもの
POINT

築140年の茅葺古民家で暮らすのは、イラストレーターの綱本武雄さんと琴さん夫妻。古民家・町並みなどの研究をしている琴さんは、解体せず受け継いでほしいという親族からの期待を受け、空き家だった祖父の家を相続。そこから、延べ200人以上の職人や地域の人々が関わる古民家改修プロジェクトが始まりました。

2010年、職人さんたちの力を借りながら、自分たちが軸となって改修を開始した綱本さん夫妻。時には解体や屋根材撤去などをワークショップ形式で実施し、若手職人やこどもたちの経験の場となることもありました。人と人が繋がり、住む前からご近所付き合いも深まります。

改修で最初に直面した課題は地盤。周辺の土地がかさ上げされ、相対的に

低くなり湿気や地下水の影響を受けやすい状態でした。基礎をコンクリートで作り直すために、当初予算から1000万円以上の追加費用が必要に。「50年100年住むなら避けられない判断でした」と武雄さんは振り返ります。

改修が終わった現在も、庭の手入れや屋根の葺き替えなど、古民家ならではの気配りは欠かせません。「光が差し込んだ縁側はあったかくてお気に入り。この家で、家族と過ごす時間が何物にも代え難い喜びです」と微笑みながら話す琴さん。武雄さんは「冬は寒くて夏は暑い。でも、1年住むと慣れるんです。相続を機に古い家が失われるケースが増える中、この家の事例が『住み続ける』という選択肢を示す灯火となることを願っています。家は暮らしてこそですから」と話してくれました。



上写真右は改修の全過程を記録した琴さんのノート。改修前から完成後まで細かく写真を撮り、費用や工程、職人との関わりを丁寧に記しています。その記録は「大阪くらしの今昔館」での企画展示や企画展図録（写真左）に活かされました。武雄さんは建築を学んだ経験から、家の風景や改修の様子をイラストに。古民家での暮らしの物語がより多くの人の心に届いています。